

『金閣寺』論

- 「美」への追求か「生」への追求か -

いん しゅうしゃん
尹 秀香

はじめに

私が三島由紀夫の作品と出会ったのは『仮面の告白』が初めてである。『仮面の告白』を読んだ時の驚きは今でもはっきりと覚えている。それは自己の幼い時からの異常な性心理を、すべてあからさまに告白した大胆さと勇氣に対する驚きでもあったが、作者のそういう大胆な書き方にもびっくりしたのである。そんなことまで書いて大丈夫かなという考えもあった。その後三島由紀夫とその作品に興味を持つようになった。

三島由紀夫の『金閣寺』は昭和三十一年（1956年）一月、「新潮」に連載され（十月完結）同年十月には新潮社より刊行された。翌年一月、『金閣寺』は読売文学賞を受賞した。この作品については、すでに多くの批評が公にされている。たとえば中島健蔵、平野謙、安部公房の三氏による『群像』の合評会で、その批評の結論として平野氏がつぎのように述べている。「今は、文学作品が非常に少なくなっているけれど、これは文学作品だ。そして中島健蔵氏はつぎのように『金閣寺』を述べている。「これから小説を書かうといふ人のためにこれを教材にするといいね。これにはどういふ弱点があり、どういふ長所があるといふ分析をやつて、文学のイロハを教へるに恰好な材料だ」。

以下で先行研究をもとにして、『金閣寺』においての「美」とは、「生」とは何かという問題を主に、『金閣寺』からみられるいろんな問題にふれて考察してみたいと思う。

1・主人公「私」の世界

A. 「私」の少年時代

この作品を分析する際、まず考えなければならないのは作品の中での主人公「私」の位置付けである。第一章にこう書いてある。

・「体も弱く、駆足をしても鉄棒をやっても人に負ける上に、生来の吃りが、ますます私を引込思案にした。そしてみんなが、私をお寺の子だと知っていた。悪童たちは、吃りの坊主が吃りながらお経を読む真似をしてからかった。」

・「吃りは、いうまでもなく、私と外界とのあいだに一つの障碍を置いた。最初の音

がうまく出ない。その最初の音が、私の内界と外界との間の扉の鍵のようなものであるのに、鍵がうまくあいたためしがない。(中略)鍵が錆びついてしまっているのである。」

・「人に理解されないということが唯一の矜りになっていたから、ものごとを理解させようとする、表現の衝動に見舞われなかった。(中略)孤独はどんどん肥った、まるで豚のように。」

・「私が手間をかけてやっと外界に達してみても、いつもそこには、瞬間に変色し、ずれてしまった、……. そうしてそれだけが私にふさわしく思われる、鮮度の落ちた現実、半ば腐臭放つ現実が、横たわっているばかりである。」

このように不具者の主人公は外界と「吃り」という恐ろしい固い壁によって疎外され、対立関係に置かれてきたのである。それ故、体の不具だけではなく精神までも不健全になったのである。つまり完全な「不具者」になったと言っても過言ではない。こんな主人公は次第に二種類の相反した意志を抱くようになる。

- a. 内面世界の王者としての空想(外界に閉ざされて内面の夢に憑かれる)
- b. 現実と対面する時の劣等感(不具者として自分は醜であると思う劣等感)

すでに自分は醜いと思った主人公は「美」について考えるようになる。

24. 主人公「私」の家庭環境

・「幼時から父は、私によく、金閣のことを語った。」

・「父は田舎の素朴な僧侶で、語彙も乏しく、ただ『金閣ほど美しいものは此の世にない』と私に教えた。」

舞鶴近郊の寺の息子である主人公は父の遺言によって金閣寺の徒弟になるが、父の讃仰していた金閣の美は、彼の心の中に現実のそれとは別に、幻の金閣を築かせた。しかもそのかれがはじめて金閣を見た時、「あれほど夢見ていた金閣は、大そうあっけなく、私の前にその全容をあらわした。私はいろいろに角度を変え、あるいは首を傾けて眺めた。何の感動も起らなかった。それは古い黒ずんだ、小っぼけな三階建てにすぎなかった。(中略)美しいどころか、不調和な落ち着かない感じさえ受けた。美というものは、こんなに美しくないものだろうか、と私は考えた。私は金閣がその美をいつわって、何か別のものに化けているのではないかと思った。」

・「私が人生で最初にぶつかった難関は、美ということだったと言っても過言ではない。」

このように実際に金閣寺を目にしてから、「父の語った金閣の幻」が現実の金閣を制して深く実在するようになる。主人公には二つの金閣寺が内存しているように考えられる。

つまり「現実の金閣寺」と「心象の金閣寺」である。

・「父の死によって、私の本当の少年時代は終わるが、自分の少年時代に、まるきり人間的関心ともいうべきものの、かけていたことに私は驚くのである。」

14. 「父の遺言どおり、私は京都へ出て金閣寺の徒弟になった。」

ここから主人公の二つの金閣「心象の金閣」と「現実の金閣」との対決が始まるのである。同時に主人公は人生にもっとも影響を与える人物に出会うようになる。

2・運命の出会い

その1・戦争 敗戦

まず、一つの事件を取り上げてみたいと思う。それは戦争、特に敗戦という事件だが、これが作者三島由紀夫にとってどんな存在であったかは、ここで触れるのは避けたいと思う（多少は作品からもみられるが）、むしろ作品から主人公「私」にとって戦争（敗戦）はどんな意味があったか見てみたい。

・「敗戦までの一年間が、私が金閣と最も親しみ、その安否を気づかい、その美に溺れた時期である。どちらかといえば、金閣を私と同じ高さにまで引下げ、そういう仮定の下に、恐れげもなく金閣を愛することのできた時期である。（中略）この世に私と金閣との共通の危難のあることが私をはげました。美と私とを結ぶ媒立が見つかったのだ。私を拒絶し、私を疎外しているように思われたものとの間に、橋が懸けられたと私は感じた。」

・「その夏の金閣は、次々と悲報が届いてくる戦争の暗い状態を餌にして、一そういきいきと輝いているように見えた。」（注：「その夏」は昭和十九年の戦争末期を指している。）

15. 「戦乱と不安、多くの屍とおびただしい血が、金閣の美を富ますのは自然であった。もともと金閣は不安が建てた建築、一人の將軍を中心にした多くの暗い心の持ち主が企てた建築だったのだ。」

災禍を、大破局といった悲劇を夢見る者にとって、戦争はこよなき恵みであった。

・「明日こそは金閣が焼けるだらう。」

主人公は半ば絶望しながら「地上をおほふほど巨きな斧の、すずしい刃の光り」のすみやかな落下を待っていたのである。破滅の炎の中で、現実の美と幻影の美との交會がなされるはずであった。

- ・「戦争がをはつた」。その日、金閣と「私」との関係は一変したのだ。
- ・『金閣と私との関係は絶たれたんだ』と「私」は考えた。『これで私と金閣とが同じ世界に住んでいるという夢は崩れた。またもとの、もとよりももっと望みのない事態がはじまる。美がそこにおり、私はこちらにいるという事態。この世のつづくかぎりかわらぬ事態……。』
- ・「敗戦は私にとっては、こうした絶望の体験にほかならなかった。」

このように主人公は敗戦によって自分の夢が実現できなかった点から、現実にくらげられたという一種の苦痛を感じるかに見える。これは後に現実に耐えられず、主導的に行動に出て金閣寺放火を犯す兆しといえるのではないだろうか。

その2 .「私」と鶴川

主人公は同じく金閣寺に預けられた、中学でも同級の快活な少年鶴川と友になる。主人公から見た鶴川は次のようである。

- ・「私はたびたび言った筈だ、鶴川は私の陽画だと。……鶴川の持ち前のさういふ仕方、すべての影を日光に、すべての夜を昼に、すべての月光を日光に、すべての夜の苔の湿りを、昼のかがやかしい若葉のそよぎに翻訳する仕方を見れば、私も吃りながら、すべてを懺悔したかもしれない。」
- ・「鶴川はいつもこうして、私の誤解に充ちた解説者であった。が、彼は私には少しもうるさくない、必要な人間になっていた。彼は私のまことに善意な通訳者、私の言葉を現世の言葉に翻訳してくれる、かけがえのない友であった。」
- ・「ひとたび彼の心に濾過されると、私の混濁した暗い感情が、ひとつのこらず、透明な、光を放つ感情に変わるのを、私は何度おどろいて眺めたことであろう！」

鶴川を太陽のような明るい存在だと信じていた主人公にとって鶴川の突然の死は大きな打撃にちがいがなかった。だが、彼がもっともショックを受けたのは、柏木から鶴川の死の真相を告げられたことであった。鶴川は生前主人公と柏木との交際をいい目でみていなかったが、なぜか柏木に手紙を出したり悩みを言ったりしたのである。それに暗い感情とは縁のないように思っていた鶴川はただの事故死ではなかった。自殺だったのである。主人公はまた現実にくらげられたような気にとられるのである。これも彼が金閣寺に火をつける原因の一つになると思われる。

その3 .「私」と柏木

『金閣寺』の登場人物のうち、「私」と柏木は特別な関係にある。すでに述べたように主人公は吃りであるが、柏木はかなり強度の内翻足である。この「吃り」と「内翻足」という二人の体質的な機能欠陥は共通の立場に置かれている。主人公が柏木に親しみを感じた第一の理由は、柏木が不具だったからである。

・「入学当初から、私が柏木に注目したのは、いわれのないことでもない、彼の不具が私を安心させた。彼の内翻足は私の置かれている条件に対する同意を、はじめから意味していた。」

「私」は柏木と友達になろうとして柏木にちかづく。すると柏木はいう。

・「君がなぜ俺に話しかけてくるか、ちゃんとわかっているんだぞ。溝口って言ったな、君。片輪同士で友だちになろうっていうのもいいが、君は俺に比べて自分の吃りも大事にしすぎているんじゃないか。」

このように不具に対する「私」の考えと柏木の考えとの間には、非常に大きな相違がある。柏木は不具を逆用して生きていけるのである。柏木はいう。

・「内翻足が俺の生の条件であり、利用であり、目的であり、理想であり、……生それ自身なのだから。存在しているというだけで、俺には十分過ぎるのだから。」

そして「美」に対する観点も「私」の考えとずいぶん異なっている。「私」は（心象の）金閣寺＝「美」の支配を受けている。言い換えれば「美」の虜である。だが、柏木にとって「美」とは何の働きかけもしないのである。否、柏木は「美」を重んじないように思われる。だからこそ「美」に支配されないのである。彼はこう言う。

・「優雅、文化、人間的考える美的なもの、そういうものすべての実相は、不毛な無機的なものなんだ。竜安寺じゃないが、石にすぎないんだ。哲学、これも石、芸術、これも石さ。」

・「不安もない。愛もないのだ。世界は永久に停止しており、同時に到達しているのだ。」

「私」は「美」の問題に逢着して、「世界を変革するのに悪は可能か」と苦しんでいたのである。主人公にとって悪魔的な行為のできる柏木はひどく魅力的なのである。一方、「私」は柏木の人生の暗さを知り、不安を感じる。

・「柏木が暗示し、私の前に即座に演じてみせない人生では、生きることと破滅することが、同じ意味を持っていなかった。その人生には自然さも欠けていれば、金閣のような構造の美しさも欠けており、いわば痛ましい痙攣の一種にほかならなかった。そこに自分の方向を見定めたことも事実であったが、まず棘だらけな生の破片で、手を血みどろにせねばならぬことは怖しかった。」

・「柏木は裏側から人生に達する暗い抜け道を、はじめて教えてくれた友であった。」

と主人公はいう。

生きたいと思っている主人公は鶴川と柏木、そして二つの金閣寺（心象と現実）のなかに挟まれて矛盾し、じたばたするのである。とりわけ「金閣寺」は彼を無気力化し、彼の行為を妨げる。彼の信念は「世界を変革するものは行為である」なのだが、「金閣寺」はそれを阻止することになるのである。そこから抜け出すために、主人公は金閣寺に火をつけたのだといえよう。

2. 「私」における金閣寺

この作品の主題ともいえる金閣寺について考えてみたいと思う。すなわち金閣寺は主人公の「私」にとってどういう存在であったか考察してみたい。

幼時から父は『金閣ほど美しいものは此の世にない』と「私」に語った。そして主人公は父に連れられて、はじめて本物の建築の金閣寺を見物するようになる。が、そのとき彼の目に映った金閣寺は予想したほど美しくなかった。これについてはすでに前にも述べたが、主人公にはこの時から「父の語った金閣の幻」と「実際の建築物である金閣寺」が存在していたのである。換言すれば「私」は「心象の金閣寺」と「現実の金閣寺」の間で彷徨う。つまり、二つの世界に股をかけているのである。金閣寺がないということは「私」の世界では想像すらできないことである。

二つの金閣寺を語る際に、無視できないのは認識と行為の問題である。「南泉斬猫」の講話は認識と行為との問題を端的に示している。老師の説明によれば、猫を斬ったのは、「自我の迷妄を断ち、妄念妄想の根源を斬る」ことだというのである。

それに対して柏木は猫が美の塊だったと強調する。そうして「猫は死んでも、猫の美しさは死んでいないかもしれない」、すなわち「美の根は絶たれ」ないとして、南泉の行為を批判する。私はむしろ柏木の説に同感を持った。主人公の場合は猫は金閣だとしてもよいだろう。主人公の立場に立ってみると「世界を変革するのは行為によってのみ可能だ」と考え込む主人公にとって、金閣寺放火は必至であるかもしれない。そして「生きていく」ために彼にできることはそれしかなかったかもしれない。そういう認

識を持っていたから彼は金閣を焼こうと決意し、それを実際に行為に移すのである。しかし個人的な考えから見れば、主人公の放火によって金閣寺が姿を消したとしても、なくなったのは「現実の金閣」つまり現実の建築である金閣寺にすぎないと思う。主人公の内面にある「心象の金閣」はなくなるだろうか。これはまさに彼の意識と関わるのである。主人公が自分の意識に視線を向けない限りは、「心象の金閣」は存在するにちがいない。主人公を支配し、さまざまな影響を与えたのは変わることのない「心象の金閣」で、けっして「現実の金閣」ではなかったと思う。こうみると「心象の金閣」＝「主人公の認識」のようにも思われる。

おわりに

では、「美」は一体なんだろうか。主人公には金閣が美であるが、柏木にはまったく美には見えないのである（これについては異義はない）。ここから私は「美」には決まった定義がないと思う。というのは人によって「美」という概念は多種多様であろうし、見る立場や考え方（意識と言ってもいいだろう）によってもかなり違うのである。こういう点から「美」は自由であると思われる。この作品の中で「心象の金閣」＝「美」という観念はすでに主人公の意識の中に根付いていたのである。金閣と人生の対立問題の解決法として、主人公は最後に生きようとして金閣放火を決意し、実際に実行するのである。主人公は今度こそ金閣に自らの「生」を阻ませまいと考える。が、「生」を阻止し、主人公を無気力化するのには「心象の金閣」ではないかと私は思う。ここで根本的な問題は（現実上の）金閣の存在と破壊ではなくて、主人公の自分自身の意識の問題ではないだろうか。つまり、「心象の金閣」は永遠に主人公を支配すると考えてもいいだろう。

なおこの作品について、魅力を感じたのは最終章のところである。金閣寺の美に縛られた主人公はついに金閣寺に火をつけ、自分もその中に飛び込んで死のうと覚悟するのである。こうみると主人公の取る行為はまさに「美」と「心中」しようとするような感じがする。金閣寺に特別な愛着を持っていた主人公はそれを自分の手で焼くことによって、金閣寺を自分一人の所有物にしたかったのかもしれない。つまり「美」と共に生き、共に滅びようとしたかのように思われる。が、非常に面白くまた皮肉なことに、主人公は頂上にある小部屋を目指して必死に戸を叩くのである。まるで救済を求めるように。だがこれが開かないと不思議な力が湧いてきて、駆け出すのである。結局、主人公は火の海から逃走できたのである。ここでその「不思議な力」という言葉に注目してみたい。死に直面したとき、主人公は「金箔が貼りつけられている三間四尺七寸四方の眩しい小部屋にアコがれていた」。それを求めるために、主人公は命をかけて必死に駆け出したのである。この力は「美」が主人公に与えてくれた拒否できない「不思議な力」ではないだろうか。もう

一つ考えられるのは、人間としての本能の力だと思われる。そしてこのようにこの作品は終わるのである。

・『「私」は遁れた獣のように傷口を舐めた。一ト仕事を終えて一服している人がよく
そう思うように、生きようと私は思った。』

参考文献：文芸読本『三島由紀夫』 河出書房新社（昭和五十八年）
日本文学研究資料叢書 『三島由紀夫』 有精堂
日本の文学 『三島由紀夫』 中央公論社